
私の転移物語

ぱんだまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の転移物語

【Zコード】

N4823BA

【作者名】

ぱんだまる

【あらすじ】

異世界に転移してしまった5人の高校生のお話。転移5日前から繰り広げる、淡い青春の物語。

「世界を愛し、隣人を愛し、一人の少年を愛する、元気いっぱいの少女。」

「才能をもてあまりしくして生きる意味を見失っている孤高の天才。」

「運から見放され、この世の地獄を味わいながら、たつた一つの絆にすがる少女。」

「がむしゃりに生き、情に篤く、己が道を歩み続ける不器用な少年。」

「高望みせず、平凡にして平和な日常をじよなく愛する少女。」

彼らの思いは異世界の果てまで複雑に絡み合つ。

氣怠い体を引きずつてゆづくとベッドから降りる。ここ数日、ろくに睡眠をとっていない。昨日も遅くまで養父の手伝いをしていた。

自分は他人より優れた力を持っている。

医師である養父を手伝いながら、あらゆる医学書を読み尽くすうちに新薬の開発や、新しい治療法の確立にすら携わるようになりました。

この力で多くの命を救つたし、今後も多くの命を救っていくだろう。今までに多くの命を救つたという実感もある。

目の前で重病の人間に開発した新薬を処方し快方に向かう姿を何度もみてきた。

毎日のよつに何百通もの感謝状が家には届いている。

俺は、確かに命を救える力をもつている。

それでも。

それでも、時々疑問に思つことがある。

俺が他人の命を救うためにじつして日々研究を続けるのは正しいことなのだろうか？

今、眼前にある命を救つても、それが明日には失われるとすれば？ 救つた命はやがて尽き果てるその時までに、一体何を残すと言つただろう・・・。

俺がいつもの思想の迷路に入つていった時、玄関のチャイムが鳴つた。

時間だ。軽く身支度を整え玄関へと向かう。

「おはよっ、浩也。」

篠崎優香。同じ施設で育つた縁で、養子にもらわれてからはしばらく会うこととなかったが、偶然にも今の高校で再会した。優香もこの近くの家の間に養子になつたのだそうだ。

そんな過去を思い出ししつつ、今頃になつて眠気が少しでてきた。昨晩はほとんど寝ていらない気がする。

俺が気だるそうにしているのに優香も気づいたようだ。

「眠そうね・・・。

また、病院のお仕事しているの?」

「まあ、そんな所だ。」

朝日を受けて淡く光る緩い坂道は一人の歩みを静かなものにしていった。

「浩也、辛くない?」

ふと、紡がれる優香の声。
誰に対する問い掛けなのか。

「・・・まだ、俺はましな方さ。」

「あ、もういいや。」

俺は彼女の手を引き、その心を癒すこともできず
このゆるやかな坂を上りきっていた。

優香とは教室が違うので階段を登つた所でわかれ自分の教室に入る。

すると、こつものあの声が聞こえてくる。

「浩也、おはよー！」

「ああ。」

「もう、また”ああ”って、いつもいつも・・・。
浩也、おはようには、”おはよう”だよ？」

九条麗奈はいつも周りに元気を振りまいているような奴だが。
だが、俺はこの程度で元気になるほど単純な作りになつていないようだ。

「ああ、気をつける。」

「はあ、気をつけるつても・・・。

あ、おはよー律子！真一君ー！」

「おはよー麗奈ちゃん」

「おはよーさん。秋変わらずさやかだな、九条は、
一体何の話をしたんだ？」

麻生真一と栗原律子が九条の元気をひらられてやつてきた。
この一人は九条と仲が良いようだ。

「浩也がね、挨拶もちゃんとできない悪い子だね、つて話。」

「あ～霧島だつて挨拶べりこぢゃんとするだらっ。」

「それができないから、私がこ～んな賑やかになつてゐるんじやない。」

「浩也、おはよひわん。」

「ああ、おはよひ。」

「ひよ、ひよ、ひよ、ひよつヒー。」

「何で私には”ああ”で、真一類ひよ”ああ、おはよひ”なのー。」

「ああ？ ひつだつたか？」

「ナホだよ、私にはこいつもこつも、”ああ”だけだつたよー。」

「セウカ・・・まあ、氣をつかる。」

「はあ・・・もつ浩也は本當に・・・・・」

何といふか、九条は突然、にぎやかになる。

俺には未だに九条の賑やかになる鍵が何なのか理解できない。

麻生にこのことを話したら、女ってのはそんなものだ、って言われた。

そんなものなのか・・・？

転移5日前 麻生真一

その日もこつもと何も変わることはなかつた。

「やうだよ、私にはいつもいつも、”ああ”だけだったよ?」

「やうか・・・まあ、氣をつかる。」

「はあ・・・もう浩也は本当に・・・・・・」

九条は相変わらず、浩也浩也って元気にはしゃいでる。
そんな元気を碎くのはいつもあるお嬢様。

「浩也、ちゅうといい?」

篠崎優香。色々と黒い噂も流れるが、儂さが魅力的ではある女子だ。

「ああ、わかつた。そうだな、外で話すか。」

たつた一言一言で、あの一人の間ではどうこう話なの
を通じ合つて、で外で話そつとまでいくわけだ。

「ひ、浩也ーもうすぐ授業、始まっちゃうよー?」

「なら、欠席だ。麻生、適当に理由つけといてくれ。」

「はいはい、いつものことだしな。」

俺の返事を聞き終わらないうちに、元やつは

篠崎と一緒に教室の外でていった。

「こんなのはこいつものことで、そんないつもの」となに毎度毎度、落ち込む奴が、この九条麗奈って奴で。

「なあ、九条。霧島は望み、薄いぜ？」

おまえが悪いって言つたじやなくて、篠崎相手じや……。」

「麻生君！ それ以上言つたら、怒るよっ。」

栗原が見かねて俺を止める。俺はビリヒモこの余計な一言、といつのを直覺無にしてばかりなのだ。

「あ、すまん……。

悪かつた、少し無神経だつた。」

「いいよ、真一君が心配してくれてるの知ってるから。まあ、一限田は古文だよ～寝つけやだめだからね、真一君ー。」

「ー、古文か……。

さ、さすがに寝なことは即答しかねるな……。

ちなみに、古文は8割ほどの確率で寝ている。

「ふふつ、麻生君、古文苦手だもんねえ～。」

「駄目駄目駄目ーーー！」

私の得意科目を寝るなんて、そんなこと許されないんだからー。

「おーおー、無茶苦茶な理論だなあ……。

なら、あいつの・・・。」

「ん? なに?」

「いや、いい。さつ、気合を入れて、寝るかー。」

「真一君ーー」

あいつの方が・・・授業をふけたあいつの方がもつと許されない。
そう、言はずだつたけど、それは俺でも無神経だと思つ。
だから、のどから溢れそつた、その言葉をあわてて飲み込んだ。
九条には、やっぱ笑顔だよ。・・・そつ、思つ俺はただの阿呆な
かもしれないな。

転移5日前 篠崎優香

私と浩也は、いつも大事な話をする時には
校舎のはずれにある、樅の木の下で話をする。

教師や生徒が通ることが少なく、人気が少ないため
何かと相談毎をするには向いているというのもある。
もちろん、一番の理由はまた別にあるんだけど。

「優香、話してこつのはなんだ？」

「「めん、またお金、貸して欲しいの……。」

浩也はお医者様の家に養子になつた、ところのもあるが
彼自身、優れた才能を發揮して活躍しており
学生ながら、かなりの蓄えがある。

情けない話だけれども、私はこつして浩也からの援助を受けている。

「また篠崎か？」

「「めんなさい……。私のバイトだけじゃ間に合わなくてつて……。
。」

「そこまでして、篠崎に義理立てる必要はないだろ？
いったん、縁を切つて施設に戻った方が……。」

「そうした方がいいのはわかつてゐる……。
でも、「めんなさい、それだけはしたくないの……。」

浩也と違つて、私の引き取り手は、散々だつた。

私を養子にした直後はそつでもなかつたのだけれど、色々あつて、今は養父も養母も手がつけられない。

最初に彼からお金を受け取つたのは、

毎日学校も休んでアルバイトばかりして過労で倒れた時だつた。

最初はその時だけのつもつが、今ではすっかり彼に頼るようになつてしまつた。

おかげで私はこうして学校に通うことができるようになった。でも、皮肉なことに、それが私からあの家から離れる覚悟を奪つていく。

「まあ、おまえがいいならいいんだが・・・。

金は前と同じ口座に振り込んでおいてやるよ。」

「『めんなさい、浩也・・・。私、迷惑ばかりかけて・・・。』

「おまえがあつて、今の俺がいる。気にするな、これはお互いの問題だ。」

「ありがとう・・・。ありがとう、浩也・・・。」

彼がいないと成り立たない。そんな依存しきつた生活。駄目だとはわかつていても、依存という関係であつても、彼とのつながりが、うれしくて、愛おしくて。それが、ますます、私から覚悟を奪つていく。

「話はそれだけなら、俺はそろそろ戻るぞ。」

授業をさぼると、麗奈がつるさいからな。遅刻程度にしておきた

い。
」

「ふふつ・・・やうね。本当にめんない、浩也。」

「いいや。優香、おまえは戻らないのか?」

「もう少しここにいるわ。

私のクラスには噂の九条麗奈さんはいないし、ね。」

「ははっ、それもそうか。それなら安全だな。じゃあ、先に行くぞ。」

「

「ええ。九条さんによろしくね。」

依存しきつた私を、彼は疎ましく思つのではないか。
その恐怖もある。
それでも、彼とこる」と、彼とのつながりを私は断ち切ることまで
きない。

転移5日前 九条麗奈

「昼だ、昼休みだ！ や、 ああメシ食べよひがー。」

真一君の元気な声が聞こえてる。
でもね、 でもね。 私はね。

「…………。」

「…………。」

「あ、 ああ・・・ 九条。 古文を寝てしまつたのは謝る。
で、 でもだなあ、 とりあえずそれは忘れよう！
綺麗さっぱり忘れてメシを食べよう！ 腹が減つてはなんとやら。
おまえの好きな古人の言葉だぞー。」

本当に、 本当に、 本当に・・・。

「な、 なあ・・・？ き、 霧島、 おまえもそつ思つよな？ な？ な？」

「ん、 あ、 ああ・・・。」

「ほ、 ほら、 霧島もそつだつて言ひしるぜ？」

本当につー。

「ん~な、 言つてない！

いい、 真一君！ 古文を馬鹿にするつてことないとせ、

日本文学の根底を馬鹿にするつてことなのよー。」

「そ、そんな大袈裟な・・・。

だいたい、古文なんて覚えたつて使つところがないぜえ？」

「な、な、なに馬鹿いつてるのよ！」

古文を習わざして、どうやって日本の古典文学が読めるの！」

「徒然草も枕草子も源氏物語もみんな古文なんだから！」

古典文学全てを否定するつもり！？」

「いや、俺そういうのに興味ないし・・・。

だいたい、どれもみんな翻訳されたのがあるつしょ？」

「わ、わ、わわっ・・・！」

真一君、洋画を借りても日本語の吹き替えを選ぶタイプでしょ？
これだから、吹き替えにならされた人つて・・・。」

「なんで、そこで映画の話に飛びんだよ・・・？」

「うなつたら未だによだれの後がみえる、

このだらしない真一君の性根を今日こやたき直さなきゃ！」

「いい？言語の一つ一つにはその言語にしかない、特別な意味が込められているの！」

言葉に翻訳はあっても、文学に翻訳はないのよ！――

文学を学ぶにはその文章が書かれた言語を知らないと、その本質を知ることなんてできないわけ！

真一君つてば、そこの所が全然わかつてない！」

「いや、だから俺、文学作品になんか全然興味ないんだつて・・・。

「

「あのね、真一君・・・・・」

「まあ、まあ、麗奈ちゃんもその辺で許してあげなさいよ～。
麻生君もさうひとつ疲れていただけなのよねえ？」

別に日本文学を馬鹿にしあつとか、そりこいつはなにわけだし・・・
・。」

「わ、わ、わうわう。わうわう感じで。」

私が怒り心頭の所で、律子の救いの手が入る。
本当に、律子は真一君に甘いんだから・・・。

「ホントにホント？

真一君つてすぐ調子いいことばかり、わざと通用できないよ
お・・・・。」

「ほらほら、麗奈ちゃん。

こつまでもぐじぐじ言わないのー早く飯こつましじょ。」

「はーい・・・・。」

「すまん、栗原、助かつた・・・・。」

真一君のだらしきにも困ったものだけど、今日の私は
真一君にばかりかまつているわけにはいかないのですっ！
なんとなんと、今日は麗奈ちゃんお手製のお弁当をつくりてしまつ
たのですー！

ふふふ・・・・古典的、だがしかし、浩也はまだこののがぐつとく
へんつながらのうひうひこののがぐつとく

るはず！

「ね、ねえ、浩也・・・。浩也、今日は食堂で食べるの・・・？」
「あ、あのね、私ね・・・。昨日ね・・・。」

そんな私の勢いは、いつもあるの人だ。

「浩也、お弁当つくりてきたの。一緒に食べましょ。」

「そうか、悪いな。じゃあ、俺は行くぞ九条。」

碎かる。

「あ、う、うん・・・。そうだね・・・。」

「行きましょ、浩也。」

「ああ、今行く。」

わかってる、わかってるんだよ。
いくら私がにぶいっていったって、篠崎さんが浩也のことをいふ想
つているのか。

それぐらい、わかっているわよ・・・。

「いっちゃんたね、霧島君・・・。」

「う、うん・・・。」

わかつて・・・いるわよ・・・。

「あ、あのな、九条！俺も今日は食堂だつたんだけどな、
たまには誰かの弁当とか食べたくなつたりするんだわ。」

「あ、あのな、九条！俺も今日は食堂だつたんだけどな、
たまには誰かの弁当とか食べたくなつたりするんだわ。
「あ、あのな、九条！俺も今日は食堂だつたんだけどな、
たまには誰かの弁当とか食べたくなつたりするんだわ。」

「うん・・・。
・・・・・あ、そ、そうだ、私、昨日お弁当つくりすぎちゃって！
ひ、一人じゃ食べきれないから、し、真一君にも分けてあげるよ
！」

「そりやどうも。」

篠崎優香・・・。美人でかしこくて、物静かで・・・。
私とは全然タイプが違う。
それが、とても寂しかった。

転移5日前 栗原律子

一日の授業が終わって放課後。開放感と
ちょっとした期待感溢れる時間の始まり。

「終わった――――――今日も俺は立派に耐え抜いたぞおー。」

「な、なに馬鹿なこと力いつぱい叫んでるの? ひとつでも恥ずかしい
人だよ、真一君。」

真一君と麗奈ちゃんはすぐ仲良し。

私はそんな一人のやりとりを見てこるのがすぐ好き。

「は、恥ずかしい人つて・・・・おまえ、何でこの気持ちをわかつて
くれないんだ?」

栗原、おまえならわかってくれるよな、この俺の熱い胸の内を・
・。」

「へ? わ、私? あ、えっと・・・・ビ、ビツなんだろ? ・・・?」

「栗原、遠慮するな。ほら、ほら、ほら、おまえも叫んでみなさい。

」

「えつと・・・・えつと・・・・えつと・・・。」

たまに私も混ざりやつたりして。すげーядキドキするナビ
でも、これも、とでも・・・・とでも好き。

「し、真一君! 律子に変なこと教えないでよー。」

律子は真一君と違つて恥ずかしい子じやないんだからねー。」

「いや、だから、その恥ずかしい子じやなんだよ・・・つたぐ。
お、霧島、もう帰るのか?」

「ああ、まあな。麻生、おまえはまた部活か?」

「まつ、一応な。霧島~おまえも剣道部に入れよお~。
おまえが入れば団体戦優勝も夢じゃなのによお~。」

「時間ができたらな。当分は個人戦で我慢してね。」

「麻生君、剣道強いんだよねえ~。この前、県大会で優勝したもん
ねえ~。」

「すう~くかつこよかつた~写メがす~くよく撮れてて、ホント最高!~

「まあ、私の次くらいには強いかもねえ~。」

麗奈ちりやんもすう~く強~いの。つらやましいなあ・・・。

「く~い、いつまでもおまえに敗けたままだと思つなよ、九条~。
次こそは、必ずだなあ・・・。」

「お~、勝利宣言だね、真一君。なら、今日もコテンパにしてあげ
よつかあ?」

「麻生、九条に勝てたら考えておいてやるよ。じゃあ、俺は帰るか
ら勝利報告待つてゐるだ。」

「お、おこが、霧島？」

霧島君は運動なんでもできるから、真一君は剣道部に勧誘しているみたい。

「いよいよ負けられなくなつたねえ、麻生君。」

「よろしい、不肖、九条麗奈、お相手いたします。」

北辰一刀流免許證伝の腕前、思ひ存分味わってもらひよおう。

「お、おこない、俺はまだ今日やるとせー言もだなあ・・・。」
ちょっとたじたじな真一君。かわいい。

「がんばつてねえ、麻生君。」

「決まりだねえ、あそつくん。

「へ、は、さ、れ、た、の、だ、い、さ、」

「んじゃ、さつそく道場に行くぞお~。」

「おお～！」

「お、おう・・・。はあ・・・。とせせだな・・・。」

ちなみに、私は剣道部の女子マネージャーさんなのです。

えっへん。というわけで、三人で剣道場に行きました。

麗奈ちゃんは小さい頃からやつてゐみたいで、すゞしく強い。真一君は高校から剣道始めたけど、もう大会で優勝しちゃうへりー

の腕前。

すごいなあ・・・。

「せいやあ―――」

「がつー。」

鳴り響く竹刀の音と真一君の悲鳴。

「小手あり、一本かな?」

「ふはつー。これで本日も真一君の100人斬り達成だねえ。」

「ふへえー。お、おまえ相変わらず強すぎだぜえ・・・。
ゼーーは、ゼーーは、ゼーーは・・・。」

100戦・・・はやつてないと思つんだけど、もうすいぶんと真一
君は

麗奈ちゃんの特訓で鍛えられていた。

二人とも防具を脱いだら汗だくなつてこるのが目に見えてわかる。

「ふひー～ですがにちよつと疲れたねえ。真一くんは少しばてす
ぎだよお～。」

「そ、そんな」と・・・ゼーーは、い、いつたつて・・・ゼーーは、
だな・・・ゼーーは。」

「はい、タオル。汗拭きなよ、麻生君。ビショビショだよお～?」

私は真一君にきれいに洗濯して、ちよつと香りをつけた

とつておきのタオルを真一君に手渡す。

「ゼラーハ・・・わ、悪い・・・。」

「はい、麗奈ちゃんも。」

麗奈ちゃんのは・・・まあそれは言わないのが大人の女って奴なのです。

「ありがと、律子。」

「麗奈ちゃんはホントに強いねえ。憧れちゃうなあ。」

私も真一君から毎日挑まれるぐらいうれしい強ければなあ・・・。
なんて思つてしまつ。

「えへへっ、律子に褒められちゃったよ。

でも律子には律子の良いところがあるんだし

私も律子に憧れてるといつぱいあるからお互い様だね。」

「そ、そんなことないよおー。私なんか、全然ダメなんだからあ・・・。
・。」

「人が怪我してると絶対にほつとけない優しい所。
小さなことでも絶対に手を抜かない真面目な所。
子供の世話とか好きで、面倒見の良いお姉さんな所。
私、そういう律子に憧れてるよ。」

麗奈ちゃん、急に褒めるからびっくりしちゃう。
真一君の前なのに、褒められてにやけちやうよ。

「や、そ、そんなことないよ～、れ、麗奈ちゃん、おだてないでよ
お～。」

「いつも頼む前に手伝ってくれる、よく気が利く所。
勉強を丁寧に教えてくれる、親切な所。
手作り弁当がうまい料理上手な所。

栗原～おまえは男子の間でも評判いいぞ～。」

「ふはっ、もう駄目～真一君にまで褒められたらニヤニヤが止まらなくな
いっ！」

「あ、麻生君まで、やだよ～。みんなして、私をおだてて、もう
う～。」

「お～、真一君もたまには良い」というねえ～。
でも、真一君の挙げた良いところって全部自分が得する」とばつ
かだよねえ～。」

「ば、ばか、そんなことはないだりつ～。」

「やだなあ～律子つていい子だから真一君にこよつと利用されな
いか、私心配だよ～。」

「なんだよ、それ・・・。何か、俺が非常に極悪人つて感じに聞こ
えないか？」

「だつて、それが真実だからねえ～。律子、真一君には気をつけな
いとダメだよ～。」

「 もう、麗奈ちゃん、あまり麻生君をいじめたらかわこうだよ。」

「 よかつたね～、真一君、律子が優しい子でえ～。」

「 だから、俺はだなあ・・・。」

私と麗奈と真一君。みんな仲良し。でも、仲良しだからこそ、不安なこともある。

考えすぎちゃ駄目。

毎日楽しいじゃない。それ以上、望んだら・・・望んだら駄目。

転移4日前 九条麗奈

明るい日差し、轟る小鳥の声。いつもと変わらぬ朝の始まり。

一日の朝は善のエネルギーに満ちあふれている。

きっと全てがうまくいく、そんな気持ちになれる。

願わくば、今日一日、この気に包まれて過ごせますよひよひ・・・。

早朝の誰もいない学校の様子は、昼間のそれと同じ場所とは思えない程違う。

静まりかえった校舎はあたかも澄み切った湖のように

朝日と相まって神秘的に感じられる。

朝の空気は、いつもと違った何かを私に期待させる。

「はあ～、早起きすると、気持ちいいなあ・・・。」

澄み切った世界を思う存分堪能していると、不意に声をかけられる。

「あら・・・おはよ～。」

そこに現れたのは、私が知る限りでは

この神秘的な世界に最も似合う人、篠崎優香さん。

「お、おはよ～いります。」

「九条麗奈さん・・・・・・よね？」

私は隣のクラスの・・・・・

「あ、知っていますーえっと・・・その、篠崎優香さん・・・ですよ
ね？」

「ええ、でも、どうして……。
あつ、浩也から話を聞いているのね……。」

もちろんそれもある。

でも、篠崎優香……彼女はそれ以外にも何かと噂のある人だ。

入学当初は社長さんのご令嬢だったらしく
その優げな印象から”深窓の姫君”と男子が騒ぎ立てるぐらいのお嬢様だった。

それが一転、お父さんの会社が倒産して、借金返済のために
篠崎さんもアルバイトにあけくれる、勤労少女の噂に。
朝晩、どこかで彼女が働いているのを見たという目撃証言が多数寄せられていた。

その後、風の噂で過労で倒れたという話も聞いたのだけど
学校に戻ってきた彼女は優げな印象はそのままに、
美しく艶やかな大人の女性になっていた。

雑誌の読者モデルで登場したこともあり、男子は
”深窓の姫君”だった頃以上に、彼女が来るたびに騒ぎ立てる。
男子つて本当にどうしようもないんだから……。

「ふふつ……九条さんの噂も浩也から色々と聞いてるわよ。
浩也が他人のことを話すなんてホントにめずらしくのに……。」

篠崎さんが浩也のことを話す時は

大人びた表情が陰を潜め、少女の面影が姿を現す。
やつぱり、篠崎さんと浩也って……。

「あの……篠崎さんって浩也と……その……えつと……。」

「私と浩也の」じ、気がなるへ。」

「えー？ええええーーー！」

そ、そそそその、わ、わわわわたし・・・。」

私は大げさに手をわたわたせてしまつ。
い、いけない・・・動搖しているつー！

「ふふつ・・・私と浩也の関係を言葉にするのはちよつと難しいん
だけど・・・。

九条さん、たぶんあなたが思つてゐるような関係じやないわよ。

「・・・え？そ、そうなんですか？」

「ふふつ・・・安心した？」

あ、安心してしまひましたつ！

「えーえつと・・・そ、そ、その・・・。」

「噂通り、かわいい子ね、九条さんつて。」

「ふひいー恥ずかしいよおーーー六があつたら入りたい・・・。

「私と浩也は・・・家族つていつのが一番近い表現かな。」

「家族・・・ですか？」

「私は浩也が支えてくれなければ生きていけない程に子供なの。
子供で子供で・・・もう自分が嫌になつちゃうくらいに、ね。

でも、私たちがもつと大人になることができれば……。
私が巣立てる日もくると思うの。」

篠崎優香さん。家庭の過酷な環境は彼女に様々な苦労を与える
彼女はその苦労を乗り越えようとしている。

少なくとも私の目には、同世代の男女よりずっと大人にしか映らない。

子供じみた考え方や甘えを彼女から感じることはない。
それでも、そんな彼女すらも浩也は支えてしまうのだという。
そこに、私の知らない二人の世界があることが、痛いくらい伝わって……。

「それまで……私たちが大人になれるその日まで
九条さん、あなたにはつらい日が続くかもしれない。」

「……え？」

「でも、あきらめずに浩也のことを想つていて欲しいの。
あなたなら……あなたになら浩也の明日を任せられる、そう思
うから……。」

「し、篠崎さん、それって、どういう……。」

「ふふっ、単なる独り言。

もう、いかなくちゃ。今日は日直なの。

それと、九条さん。私のこと、優香でいいわよ？」

「えっ？」

「名字で呼ばれるの、あまり好きじゃないの。

でも、私たちがもつと大人になることができれば……。

今度からね、優香って呼んでね。」「

「は、はー。あ、じゃ、じゃあ
私のことも・・・その、麗奈でいいです!」

「やうね、麗奈、って呼ばせてもらうわ。

あと、かしいまいなくていいわよ。あなたとは友達でいたいから、
ね?」

「え、は、はー・・・じゃなくて、その・・・う、うん・・・、」「
こんな感じ?」「

「ふふっ、そうね、合格、かな。それじゃ、私、もう行くから。」

「あ、うん・・・それじゃ、また・・・。」「

「ええ、またね、麗奈。」「

篠崎・・・優香に初めて麗奈、って呼ばれて
女の私でも、ちよつとドキつとしてしまった。
やつぱり、優香、綺麗だなあ・・・。

転移4日前 麻生真一

朝練は体力づくりが中心になる。
筋トレ、ストレッチを淡々とこなすこともあれば
ちょっとした遊び感覚でやつたりもする。

今日は腕立て10回終わるまでの時間を競い合つた。
いつも審判をしてくれる栗原は珍しく今日は朝練にこれないとメー
ルがあった。

仕方ないので一年の女子に審判を頼み
九条と俺で腕立て勝負を始めた。

女相手に筋トレの勝負とか、と思うかもしれないが
あいつの腕立ての早さは半端ない。
とてつもない瞬発力を持っている。常人とは思えない。
故に、俺は全力をだす。ああ、性別なんて関係ない。
俺は勝つといつたら勝つ！

・・・・・

・・・

・・・

「九条先輩のかち！」

無情にも響く後輩の勝者宣言。

「いえーいーうししあ。

まだまだよのう、真一君。」

「ば、馬鹿な・・・。」

俺が10回目に入ろうかといつも
もう九条は10回目を終えてしまっていた。

「じゃー私はいつものイチゴオレ。
よろしくね、真一君。」

敗者は学校の自販機でジュースを一本おじるはめになる。
とほほ・・・九条とやるようになつてから
連戦連敗中のオレは、このままいくとイチゴオレ破産してしまひ。

しぶしぶと、イチゴオレを買いに学校の裏手にある自販機まで
足を運ぶことになった。

あいつを見かけたのはそんな経緯でイチゴオレを買つた、その帰り
道だった。

学校の裏手にある自販機からやや離れた所に小高い丘があり
そこには巨大な檍の木がある。

でかくて、生徒の遊び場にはよさそだが
ちょっと前に変質者がここで遊んでいた生徒を怪我させたらしく、
申し訳程度に、立ち入り禁止の立て札がたつている。

まあ未だにその時の血が残っているとか

そんな冗談に聞こえない話もあり、教師も生徒もよりつかない所だ。

そんな所へ歩いていく女性徒をみかけた。

あいつがこの時間にこの辺にいるなんて珍しいな。

そう思つた俺は、特に何か思つたわけでもなく、自然と声をかけて

しました。

「よひ、篠崎。」

「……あら、えつと……麻生君……だけ?」

「そ、霧島と同じクラスのな。」

何度か霧島と同じいる時に会つてはいるので
お互い顔見知りには違いないんだけど
霧島を通じてしか接点がなかったので、まあこうして一人で話すの
とか
今まで一回もなかつたな。

「こんな朝早くに学校きてるのも珍しいな。」

「今日は日直だつたんだけど、もう当番の仕事終わつて暇だつたら
ら。」

「暇だつたつても、この辺の噂、聞いてるだろ?」

「応立ち入り禁止だし、犯人もまだつかまつていらないらしいから
な。」

「こには割と危ないって噂だぜ?」

「そういえば、そだつたわね。」

「まあいいじやない、どこにいたつて同じことだもの。」

この学校での篠崎のイメージは優秀な才女様つて奴だ。

学力テストでも度々学年で一位になつてる。

最近は妙にあか抜けてきて、化粧もするようになつてるもんだから

色々と変な噂も聞くようにはなつてきだが、
その辺はやつかみもあつて真偽はよくわからない。

「篠崎つてこんな所で一人でうるさいする奴なのか。
あんまりそういうイメージじゃなかつたわ。」

どちらかといつと、暇だつたら教室の隅や図書館で
静かに文学書を読むような、といえばわかつてもらえるだらうが。

「麻生君つて浩也と仲が良ーいの?..」

「ああーどうだうなあ・・・。

ほり、霧島つてあまり人と深く付き合つ奴じやないからな・・・。

まあ、九条の次くらいには仲良いはと思つぜ。」

霧島と一番つるんでいる男子は、間違いなく俺だとは思つが
仲が良いという感じじやないな。
相手にされていないとも言つ。残念ながらな。

「九条・・・。」

篠崎にとつては九条も俺と同じく、
霧島を接点にした関係でしかないと呑つた俺は
慌てて説明をつけたしたのだが。

「九条麗奈。俺や霧島と同じクラスの奴。
剣道部で、表彰とか何度もされてるから、顔ぐらい知つてるんじ
やないか?」

「ええ、麗奈のことはよく知つてゐるわ。」

「え、麗奈と浩也も仲がいいわよね。」

「まあいつも俺も、霧島とは同じ中学だったしな。
それにしても、篠崎は霧島とは中学別だったのに、仲良いよな。
一年の頃から仲良かつたし、どこで知り合ったんだ？」

「ふふっ・・・。昔ちょっとね・・・。」「

そういう篠崎は大切な物を見るような目をする。
普段はすましていて、周りが騒ぎ立てるのも
そつぱり理解できなかつたが、こうこう顔もするんだなあと思つた。

「ふうん・・・。幼なじみか何かか？」

「そうね・・・。もういつた感じかしら。」

「そつか・・・。

・・・・んじゃ、俺は先に戻るぜ？」

「ううん、私はもう少しここにいるわ。」「
そういえばイチゴオレを待つている奴がいると思った俺は
とつとに戻ることにした。あんまり遅れるとあいつの機嫌が大変な
ことになる。

「ええ。私はもう少しここにいるわ。」

「授業に遅れるなよ？」

「ここ、チャイム聞こえにくいから、予鈴聞こえないかもしない

ぞ？」

「ふふつ・・・ありがとう、麻生君。

あなたって案外、優しい所もあるのね。」

「まあごく一般的な紳士の嗜み程度にはな。
それじゃ、またな。」

「ええ。」

そういうつて俺は剣道場へと戻つていった。

途中で振り返つて様子をみてみたが、篠崎は特に何をするわけでもなく

木によりかかり、どこか遠くを見ていた。

イチゴオレはすっかりぬるくなつていて、俺は九条のぐちを授業開始まで延々と聞かされることになつたのだが。

転移4日前 栗原律子

授業開始の5分前に、ようやく教室にかけこむことができた。

教室ではほとんどみんな席についていて

扉を開けると、みんなの目線がこちらに集まるのが少し恥ずかしかった。

こんなギリギリにくるのなんて、初めてだつたから

その視線が何か落ち着かず、見知った人の声を聞くとほつとした。

「律子、今日は遅かったねえ。寝坊でもしちゃつたとか?」

「あ、そういうわけじゃないんだけど……。」

「そらそつだな。九条じゃあるまいし……。」

あ、真一君。今日は朝練で一緒にいれなかつたからちょっと残念。後で朝練で何やつたのか聞いておかなきや……。

「う、うるさいよ、真一君!」

でも、律子つて朝練に遅れたことなんて一度もなかつたから何かあつたのかなつて……。」

「うん……実はちょっと弟が熱だしちやつてね。
それでちょっとタバタしてたの。」

「えー? まさ君、大丈夫なの?」

「あ、うん……单なる風邪だつて。

大丈夫……つてわけじゃないけどそんな大袈裟な病気じゃない

「そつか・・・早くよくなるとといいね・・・。」

「うん、ありがとうございます、麗奈ちゃん。」

弟の正志はまだ小学生だったので一人にするのは心配だったんだけどお父さんがお仕事休んでみてくれる、というので私は学校にいくことになった。

三時間目の授業が終わる頃に連絡があり、で
熱もだいぶひいたときいて、一安心つていった所。

「ぐはっーーー！ いや、昼休みだーーー！」

ふふつ、真一君お疲れさま。

そして、そしてお昼休みになつたんだけど、もうなんていうか、見てるこつちがハラハラしてしまつ。

「あ、ひ、浩也！」

わ、
私ね・・・き、昨日ね・・・。

麗奈ちゃんがお弁当箱を2つもつて霧島君に話しかけている。でも、篠崎さんはとなりのクラスだし、早く言わないと……。

「お前が、お弁当つくれて来たの。一緒に食べましょ。」

隣のクラスから篠崎さんが現れてしまつよ！

と思つた時には彼女はもう目の前にいた。
やつぱつこじうなるのかあ・・・。

「わかった、じゃあ、俺は行くぞ九条。」

「あ、う、うん……そうだね……。」

「行きましょう、浩也。」

あ、そうだ……麗奈も一緒に食べない?」

「えつ?」

驚く麗奈ちゃん。でもそれ以上に
その後ろにいた私と真一君はお互い口をあんぐりさせて
見つめ合ってしまった。

「せっかくお友達になつたんだし、ね?ダメかしら?」

「え、い、いえ!ぜ、全然ダメじゃないです。
……じゃなくてだ、ダメじゃないよ。」

「わづ、よかつた。浩也もかまわないわよね?」

「あ、ああ。俺は別に問題ないけどな。」

「それじゃあ行きましょう。」

「あ、う、うん。あ、律子、真一君。」

「あ、今日は優香と一緒に食べてくるね。」

ゆ、優香・・・。

ちよつと前までは篠崎さん、だつたはずなのに。
れ、麗奈ちゃん、い、い、一体何をやらかしたの・・・?

「あの・・・一人とも、聞いてる?」

「う、うん、き、聞いてるよ。れ、麗奈ちゃん、ファイトだよー。」

「そ、そしだな、が、がんばれよ。ふあ、ファイトだよ、だ、九条。」

「

私も真一君もちよつとおかしな励ましになつてしまつた。

「もう、一人とも意味不明だよお~。」

えつと・・・それじゃ私もう行くから・・・。待たせてごめん、
優香、浩也。」

「かまわないわ。それじゃあ行きましょう。」

そういうて三人は教室からでていつてしまつた。
えつと・・・これ、なんていう状態?

あの二人の間に麗奈ちゃんが何で割り込めちゃうの・・・?」

「な、なあ・・・栗原・・・。」

「な、なに? 麻生君・・・。」

「あいつつて篠崎とあんなに仲よかつたつけ?」

「わ、私の知る限り話をしたこともないはずだけど・・・。」

「あ、せつか……。」

そこからしづらへまひーとしてしまい
私は今日、お弁当を作り忘れていたことを思って出しちゃった。

「あ、今日お弁当つけてないんだった……。
食堂行かなきや。」

「んー？ 栗原、食堂なの？」

「うん、麻生君はどこで食べるの？」

「うーん、俺も食堂のつもりだったんだけど
あの謎の光景にびっくりして、かなり出遅れたからなあ……。
もう席があいてないかもしれないな。」

「そんなにすげーの？」

「まあ行つてみるか。」

そんなこんなで真一君と一人で食堂にいくことになった。
まさかの、一人っきりでのお食事と思つたんだけど……。

「うわあ……一杯だね……。」

「うーん……の様子だと空ってる席なんてないな……。」

「『れじや、』飯食べるところだね……。」

真一君とのお皿が・・・。

「まあ、いつの時は他をあたるわ。」

「他? 他って? 食堂ついて? こないんでしょう?」

「学校の食堂は、な。

あの堀を越えた先に行きつけの食堂があるんだよ。」

そうこうで真一君は学校の外を指出し合った。

「え? あ、あの堀って? 」

あれを超えたら学校の外にでちゃうよ?」

「大丈夫だつて。そんなに遠くないし? 」

「だつて? だつて? 勝手に学校抜け出したらいけないんだよ! -?
?」

「栗原は眞面目だなあ? 」

俺達は学校を抜けだすんじゃないの。昼飯を食べにいくだけだぜ

?」

「それはそうなんだけど? 」

「ほり、早くじょうぜ。」

「へり近いつていつてもやつのんびりはできないぜ?」

「あ、あ、麻生君、まつよー。」

そういうつて走り出す真一君を追つて、問題の堀まで来てしました。

「ほり、いじを乗り越えりやすぐだ。」

「え? いじを超えるの・・・?

だ、だめ・・・わ、私には無理だよ・・・。」

「何言つてるんだよ、たいしたことないつてー
俺がひつぱつてやるから。」

そういうつて、真一君は堀の上にかるく飛び乗り、
その上から手をさしのべてくれる。

「ああ、つかまつて。」

私はその手をとり、いじの高い堀を登つてしまつ。
今まで学校をさぼつたことのない、真面目で通してきた私にとつて
昼休みとはいえ、学校の外に抜け出すなんて、とんでもない大冒険
なのだ。

私が登り切ると、真一君は軽々と堀から学校の外側へと飛び降りた。
そして、優しく声をかけてくれる。

「ほら、飛び降りてみな。

大丈夫、何かあつても俺が受け止めてやるから。」

私は彼の手をつけないで壁を登つた時ですら
体の火照りを押さえるのに必死だつた。

なのに、こんな時にそんな笑顔でそんなこと言われたら・・・。

普段の私なら怖がって、とても飛び降りるなんてできなかつただろ
う。

でも、その時は自然と真一君の元へと飛び降りる事ができた。

「おひと。

な、簡単だら?」

そういうて、飛び降りた私を受け止めて真一君が笑顔で私に語りか
ける。

ああ、また恋こに落ちてしまつた。

真一君に恋こにおちつしまつのは何度田だら?

恋とこのはせびりも深みがあるのだら?。どんどん、落ちていぐ。
ちなみに、このとせ、お姫様だつてで受け止めてもらつたー!
もつ、一生分の幸せをつかつてるよ、これ!

デキドキもおやめになつてまま、そこからすぐ田の前にあつた
定食屋さんのような所にまつた。

「おや、真ちやんじやないかい。こちつしゃこ、今日は何とする?.

お店の中には人の良さがつなおばちゃんがいた。

「俺は・・・そうだな、カレーチャーハンでいいよ。
栗原、おまえは何にある?..」

「え・・・?わ、私は・・・。

えつと、じゃあ、麻生君と回じ奴、お願ひします。」

「ば、ばつかーーーのカレーチャーハンは恐ろしく辛いんだぞ?」

初心者には早いつて、絶対！」

「ええ～大丈夫だよお～。私、辛いの別に苦手じゃないよ？」

「ああ・・・俺でさえあの辛さを克服するのに一ヶ月の時間要したというのに・・・。

栗原・・・骨は拾つてやるからな・・・。」

「もう～～大袈裟だよ、麻生君～。」

「カレーチャーハン2つだね。
せつかく真ちゃんの彼女が来てるんだ、腕によりをかけてつくつ
てあげるよ。」

「か、彼女つて・・・。」

おばちゃんのトンでも発言に私も真一君も顔を真つ赤にしてしまつ。
照ってくれるつてことは、少しは脈があるつて思つて良いのかな・・・。

「ば、ばか、おばちゃん、違つつて！

栗原とはそ、そんなんじやないつてのー！」

「おや? そうなのかい?
ははつ、それじゃ今日だけは彼女になつてもらいないよ、真ちゃん。

「い、いいから早くつづつてくれよ、おばちゃんー。」

「おや、やうだつたね、悪い悪い。」

「つたぐ・・・。」

「一人の掛け合いをみていると、とても店員とそのお客様といった関係には見えない。

「こういうお店だからなのかもしない。

「一人の関係はまさに家族のそれですら見えた。

「優しそうな人だね。」

「はあ？ あのおばあちゃんが？

栗原：「おまえ、感覚がちょっとおかしいぞ？」

「でも、麻生君、とっても楽しそう。」

「よせよせ、おれはだなあ・・・。」

「麻生君のお母さんもあんな感じなの？

何だか母親にからかわれてる男の子って感じしたよ？」

「ん・・・・そう・・・・か・・・・。」

「麻生君・・・？」

「てっきり九条から聞いていると思つたんだがな。」

「え？ な、何の話・・・？」

「俺、母親いわけ。

親父が男手一つで俺を育ってくれた。だから、母親ってよくわか

「らしいわけだ。」

「あつ・・・えつと・・・そ、そななんだ・・・。
わ、私知らなくて・・・その、『じ、じめんなさい・・・。』」

「別にいいさ。母親つてのはわからないけど
たぶん、おばちゃんみたいな存在なんだな・・・って
思つてるのは本当のことだしな。」

「ん・・・で、でも・・・でも・・・やっぱり『めんなさい・・・。
』」

「俺には母親の記憶がない。だから、俺にとってはそれが普通なん
だよ。別に母親のいる家庭をうらやましく思つたことはない。」

俺と親父は一人つきりでも確かな家族だから。
ドラマでよく冷めた関係の家庭とかあるけど
もし、現実にああいう家庭があるなら俺はその何倍も幸せなわけ

よ。

「麻生君・・・・・。」

「母親がいなーって聞いて悪いつて思うのは

栗原、おまえにとつて母親の存在が大切なものってことだよ。」

「そ、そんなこと・・・ないと・・・と思ひナビ・・・・。」

「栗原、おまえの母親のこと、教えてくれよ。おまえの大切な人の
こと。」「

「母親がいなこと不幸と思つたことはないけどやつぱり興味はあるわけよ。」

「……は、恥ずかしいから誰にも話しかけダメだよ……。」

「おひ、約束、な。」

「う、うん……や、約束だよ……。」

その後、私は私のお母さんについて真一君と一杯話をした。料理が上手で私もお母さんに憧れて料理を始めたこと。お父さんと仲がよくて娘の私が目のやり場に困るへりへり仲良しな恋人同士だつてこと。

私が病気の時にはずっと寝ずに看病してくれたこと……。私の大好きなお母さんのこと、いっぱい、いっぱい真一君に伝えた。母親を知らない真一君が母の存在を取り戻せるように……。母親という言葉が彼にとつて決して悪いイメージを連想させないようだ……。

真一君は一生懸命話を聞いてくれた。

とてもうれしそうに、でも時には悲しそうに……。
ずっとずっと……私の言葉に耳を傾けてしてくれた。

この日のお昼ご飯は私にとつてかけがいのない思い出を生み出してくれた。

真一君と心の底のから語り合えた時。そして、ちよつと辛かつた力レーチャーハン。

この日、この時、この瞬間……。私たちは友達の壁を超えたのだと思つ。

その時から、私は心の中だけでなく、彼のことを「真一君」と呼ぶようになった。

俺は正直困惑していた。

九条と優香は正直仲が悪いと思つていた。
いや、実際に悪かったと思つ。

それがある日学校にきたら、お互に口笛で浮び合つてしまつた。それで一緒に食べようとしたのだが、
一直到昼まで一緒に食つていたんだ。

「しかし、いつの間におまえら知り合になつていたんだ？」

「へ？えっと……そ、それは……。」

「ふふつ、内緒よ、浩也。ね、麗奈？」

「うん……そ、内緒なんだよ、浩也。」

「ふん……勝手にしろ……。」

なんて言つた女は一人になるだけでこうも違つものかと思つ。優香も一人の時はおとなしいのに、一人になつた途端よく話すようになった。

「あ、浩也すねてるー！

「ふふつ、初めてみたよ、浩也のすねてるヒー！」

「ホント？かわいいでしょー。

浩也ったら、すねるとこつも「うな」。

「へえ～、浩也っぽい、見かけによひか、子供っぽいことがあるんだあ～。」「

「へ～、おまえら一人そろうと圧倒的に俺が不利な気がする・・・。

「

「ふふっ・・・たまにはこうこうのもこいでしょ？

浩也つたらいつも余裕だもの。たまにはドヤギヤしてもらひわなないで、ね。」「

「ふん・・・勝手にしや。」

九条麗奈・・・不思議な奴だ、あの優香があれ程心を許すとは・・・。

奴は俺や優香にはない、何かをもつているのか？

例えばあの深い闇に光を当てる、心の救いとなるべき何かを・・・。

「また浩也すねてるよお～！何だか今日の浩也はかわいいよお～。

・・・考えすぎだな、單なる天然だら。

「ふふっ・・・でも、今日は風が気持ちいいわね・・・。

いつもこの日は外で食事をするのがとっても楽しく感じられるわ。

「二人とも、いつもここ飯食べてるの？」

「せうね・・・二人の時は大抵ここ来て時を過ぎすわね・・・。

「ここは学校のはずれにある、大きな樺の木。

最近、ここに遊んでいた生徒が血まみれで発見されている。巷では変質者がやつた、なんてことになつていて、アレはそんな生やさしいものじゃない。

ああいつた傷をつけるなら、日本刀とかそういうたぐいの武器が必要になる。

他にもライオンとかそういう大きさの肉食獣であるとか、だ。

傷のたぐいが全然違う。第一発見者の俺が言つんだから間違いない。

「ここ」の噂はどれもくだらないものだけど、たつた一つ、良い噂もあるわ。

あの大木には大地の精靈が住んでいて、どんな願いでも一つだけかなえてくれるの。

「どんな願いでも叶うの? 夢みたいな話だねえ。」

「どんな願いでも叶う代わりに、その身を生き贋として差し出す必要があるんだって。

ここで見つかった人は、そつやつて自分の身を生き贋に捧げた人らしいわよ。」

「ひつ・・・・なんだから急に夢がなくなっちゃつたよ。」

「ふふっ、何かを護るために何かを犠牲にしないといけない。

そういう所があつて、この噂なら信じてもいいかなつて思つてる

わ。」

「で、でも・・・そんなの悲しいよ・・・。

私はそういうのはやだな・・・。」

俺はあの現場を見て以来、再びこの場所には近寄らなにように優香

にはいったが

あいつは頑として言つことをきかなかつた。

本当に、そういうた荒唐無稽の噂を信じているとは思えないがそれに近い何かがあるんぢやないかと思つてゐる。

「……めんなさい。あまり明るい話じやなかつたわね。」

「わ、私は別にかまわないよ……？」

「生け贅なんてばかげているさ。

おまえが何かを望んだとしても、俺が生け贅になんてさせない。

「えつ・・・・・あ、ありがと・・・・浩也。

ふふつ・・・・・頼りにしてるよ・・・・。」

あいつは、ここで何かをかなえてしまつたのかもしれない。
だからその代価を支払う時を待つてゐるのだとしたら。
それでも、俺は何とかしてやりたい。そつとくつてゐる。

事件を思い出してすっかり忘れていたが

麗奈と優香の組み合せは思つた以上に強力だつた。

「そんなわけで、浩也からもお願ひしてよ。」

「そうね、浩也。」

麗奈のためにも、一緒にお願ひしてあげたら?」

何の話かといふと。放課後、麻生が例によつて
俺に部活の勧誘をかけてきて、運悪くそこに九条が相乗りしてきて
さらに運悪く、そこに優香が現れてしまつた。

「真一君も、このままだと私に一勝もできないまま卒業しちゃうからね。」

涼夏先生の元で少しは鍛えられれば、また違った発見もあるかなつて。」

涼夏先生といつのは、俺と九条が師事している武道の師範で武道全般に通じている化け物のような人だ。

柔道、剣道、合氣道あわせて十何段になるとかなんとか。

「涼夏先生は弟子を選ぶし、どうだろうな。」

「だから、涼夏先生お気に入りの浩也から頼んで欲しいっていってるんじゃない！」

「その見返りに、俺はあの人との稽古に延々とつきあわせられるんだが・・・。」

「あら、浩也ったら。涼夏先生に命の危険を感じさせない、凶暴なのに、稽古につきあうのが怖いって言つの？」

事情をしる優香と勢いのある麗奈によつて、俺はタジタジになつていた。

ちなみに、涼夏曰く、命の危険を感じるようなドキドキした真剣勝負ができる人は少なく俺はその数少ない一人だというのだ。

とはいっても、俺が勝てたことはただの一度もない。むしろ、ボロボロに負ける。

それで、何故命の危険を感じるんだ・・・？

「霧島っ！俺からも頼む！俺を・・・俺を男にしてくれっ！」

麻生のよくわからない熱血スイッチが入ってしまった。
俺は断り切れず、しぶしぶ了承し、涼夏先生の道場まで案内することになった。

「で、この子が新しい門下生？」

「そうです、麻生真一君って言つて、私と同級生なんです。」

「努力は足りませんが、そこそこ才能はある奴です。
涼夏師範に鍛えてもらえれば、と思いまして。」

「お、おい、霧島・・・。」

「なんだ、麻生？」

「」の人がさつき言つてた涼夏師範なのか？」「

「そうだ、九条がさつき言つていただろ？」

「何か、九条よりさらに華奢じゃないか？」

「武道の達人っていうから、もつとごつい人かと・・・。」

「麻生君・・・だけ？私が師範じや不安かしら？」

やばい、涼夏先生の眼がマジになつている。
麻生、恨むな『』の口の軽さを恨むんだ。

「や、そんなことはないんですけど・・・。

思つたより華奢だし、稽古とかしたら何か怪我をしちゃいそうで・・・。」「

麻生は思つた以上に馬鹿だつた。
この後、ストレス発散代わりに稽古につきあつ俺の気持ちも考えて
欲しい。

「人は見かけによらないものよ、麻生君。何なら少し試してみる?」

「え、でも俺、手加減しませんよ?」

「良い心がけね・・・でも、それは私も同じ。
私だつて武道を志すもの。試合を挑むからには相応の覚悟はでき
ています。」

「それまで言つなり、お相手させて頂きます。」

俺も九条も、呆然とその成り行きを見守るしかなかつた。
涼夏師範は確かに小柄で見た目も綺麗な女子つていう感じで
まあ、麻生のいうこともわからなくはない。
だが、もう一度いつておく。

涼夏師範は、柔道、剣道、合氣道で数十段の腕前をもつ化け物だ。
いや、正面きつて化け物といつたら命がないので口にはだすなよ。

麻生は予想通り、打ちのめされ、たたきとばされ、
ぼろ雑巾のようにズタボロになつっていた。

ただ、思つた以上にタフで何度も起きあがる麻生に対しても
涼夏師範の何かが目覚めたらしく、これからもずっと稽古をつけて
くれるそうだ。

だが、俺はよかつたな、等とほとても言えなかつた。

九条麗奈。正直私は勝てないと思ってしまった。
私が10年以上かけて、その思いを全て注いで
ようやくつなぎ止めている彼との絆。

それを、彼女はたった3年、同じ中学校にいただけで、
あつという間に追いついてしまった。

私は彼との絆を決して手放したくない。
少なくとも、この命の続く限り。

だから、というわけじゃない。彼女にそれなりの興味もあった。
だけど、もしもの時、彼女の性格なら本当のことを言えば
身を引いてくれる。そういうた打算がないわけではない。

私はそういう汚れた女だから。

「もう真一君、だらしないよ。」

麗奈と仲良くなつてからの一日は怒濤のようだつた。

彼女の元気はどんどん私を突き動かし、それが浩也にまで及んだ。
浩也と同じ理由で私も彼女の魅力を十二分に見せつけられた。
それは友達としてうれしくもあり、恋敵として恐ろしくもあつた。

「も、もうだめ・・・だ・・・。
き、霧島・・・骨はひろつてくれえ・・・。」

麻生君はへろへろになつている。

涼夏先生にあんな口をきくなんて、正氣とは思えない。

「あ、私こいつちだかり。またねー。」

そうこいつて栗原さんが帰つていぐ。

彼女の」とはいい。浩也はああい「う子には興味ないから。

「またねー律子。

ほらほら、真一君、こつまでもへろへろしないの~。

あ、涼夏先生の所には毎朝顔をだすこと。朝練より優先ね。」

「あ、朝から、あんな日にあうのか・・・。

な、なんだかこれつて命の危険を感じてきたぞ・・・?」

「命の危険を感じるぐらこの真剣勝負が涼夏先生のモットーだからな。

喜べ、麻生。おまえは見込みがあるつことだ。」

「あ、じゅあ私と浩也はこいつちだかり。

「ごめんね、優香。真一君が倒れたら見捨てていいからね。」

「つておこー見捨てるの進めるなよー。」

「ええ、倒れないようにがんばってね、麻生君」

「へいへい・・・たづく、九条も篠崎も仲がよここつて。」

「それじゃーねー。」

そつこつて、浩也と麗奈とわかれ、麻生君と一人になる。

今日の朝に少し話したのと、麗奈の騒ぎの渦に巻き込まれたのもあって

麻生君とも、それなりに話してもいいとは思つよつたなつた。

「もう涼夏先生の所に行くのは断つたらどう~。
今日のでこりたでしょ？ あの人、厳しいわよ。」

「まー厳しいししんどいのは確かだけどな。

どうしても、強くなりたいんだ。しがみついてでも、ついていく
さ。」

麻生君はまだ涼夏先生の特訓を受けるようだ。

「男の子つてそこまで強くなりたいものなの？」

「あーまーなんていうか、その・・・。」

「ああ、麗奈に負けるのが、かつこわるい、とか思つてるんだ。」

「ば、馬鹿つー違つつのー！」

「ふふつ、男つて単純。」

麻生君が麗奈のことを気に入つてるのは知つていた。

彼ががんばってくれれば、私ももう少し氣が楽になるのだけど・・・。

「麗奈は浩也と戦つても勝つてゐる時もあるし、相当強いわよ。
あの一人と同じレベルになるのは、かなり大変だと思つわよ。」

「まあそれは確かにな。

あの一人が俺と同じ年なんて未だに信じられないからな。」

「・・・ふふつ、確かにね。

あの一人つてちょっとずるいわよね？

何でもかんでも出来過ぎていて。実は2つぐらい年上かもつてい
つも思うわ。」

「あれ、篠崎もさう思つ？」

「浩也とは子供の頃からのつき合いで、友達は浩也しかいなか
つたのね。

だから、私にとつての普通は浩也だったんだけど、彼がその・・・
。

あまりにも出来過ぎるから、私、自分が駄目な子だつてずつと思
つていたの。」

懐かしい昔。私が10回聞いても覚えられないものを、彼は一度で
覚えてしまつ。

私が何時間も考えてもわからない問題を彼は見た瞬間に解いてしま
う。

「篠崎つて頭良いつてイメージあつたんだけどなあ・・・。」

「だつて、いっぱい勉強したもの。浩也に追いつくとい、普通にな
らうと思つてね。

何度も本を読んで覚えたし、分からない問題も、
何度も何度も考えて解けるようになつていった。
そして気が付いたら才女なんて呼ばれていて、
でも私はまだ自分のことを駄目な子だつて思つていて。

浩也が天才で、私が普通なんだつて気がつくまでに10年ぐらい
かかったと思うわ。」

「10年ついで……おまえも結構ドジなのな。
普通はもつと早く『氣づく』だろ……。」

「う、うるさいわね……そ、そういう麻生君めじりなのよ?
麗奈との話、聞かせなさい!」

「う、お、俺か? な、何か恥ずかしいな、昔の話なんて……。」

「あら、私にだけ話をさせておいて、自分の話となると尻込みする
『氣?』

「う、うるさいな……わかったよーは、話せばいいんだろー。」

「せうせう、話してくれればいいのよ。」

麻生君の、ところより麗奈の過去には興味がある。

「とは言え、何から話したものか……。」

「じゃあ、最初に麗奈と知り合ったのはいつ?」

「最初は……ああ、最初はアレだな。」「

「アレ?」

「俺と九条は同じ中学だったんだけどクラスとかはずつと別だつた
んだよ。」

「ただ、中学一年ぐらいたよひとした事件があつてな……。」

「事件？それがきっかけなの？」

「俺ってそれまで結構ガラ悪かったのよ。

ケンカで負けたことなんてなかつたし三年相手でも楽勝だつたな。

」

「大抵の奴は俺の名前聞くだけでぶるちゃつて

二年になるとまともにかかつてくる奴もいなくてな。
で、学校では結構やりたい放題だつたのよ。教師もびびつて何も
いつてこないし。」

「いるわよねえ・・・そういう人つて。

でも、今からは想像できないわね・・・。随分大人しくなつてる
わよ？」

「まあ、あの事件があつたからな。」

「いよいよ、本編の始まりね。」

その話は私と麻生君の関係を今までとは違つたものにした。
決して届かない、天との壁を何とか越えようとあがくもの。
私たちは同じ高みを目指していくのだった。

俺は篠崎に九条との出会いを話すことになった。
始まりはそう、あの事件だ。

「教師でハゲ田って嫌な教師がいてな。
俺のような奴にはヘコヘコしてんだけど普通の奴には態度でかい
んだよ、そいつ。」

「はげた……？」

「あだ名なんだけど……あれ、本名なんだつけ?
みんなハゲ田って呼ぶから本名忘れたな……。
まあ、そのハゲ田なんだけどそいつが栗原にネチネチからんでだ
わけよ。」

「栗原つて、同じクラスの栗原さん?」

「そつ、俺はその頃は知り合いでなかつたんだけどな。
栗原は生徒会やつてたんで、顔を知つてるぐらいだつたな。
で、ハゲ田が担任のクラスを通りかかるとあいつの嫌な声が聞こ
えてきてな……。」

その様子を再現するごだ。

（）

以下、麻生真一がモノマネをしてお伝えしています。

「栗原あ・・・おまえ、今回のトストは随分と点数が上がってるじゃないか・・・。」

「そ、そりですか・・・。」

「アリですかじゃないだろー。あやしい・・・あやしこぞおー。」

「な、何がですか・・・?」

「おまえ、カணニングとか、してないよなあー。
先生、信じてるけど、でもこんなに点数上がるとやっぱおかしいよなあ・・・。」

「し、してません、カণニングなんて!」

「アリかあーでも、おまえテストの田、俺のチエック受けないだろおー。

チエック受けなこつて」とはやつぱりやましい事があつたんじやないのかあー?」

（――）

「麻生君、ちよつといめんだ。チエック・・・?チエックって何?」

「ボディーチエック。単なるセクハラだよ。
気の弱い子狙つてやつてるわけ、ハゲ田。」

（――）

以下、麻生真一がモノマネをしてお伝えしています。

「だ、だつて、あんなの・・・。」

「あやしい・・・あやしいぞお～栗原あ～い、今からでもチョック受けとみるかあ～？」

「や、やめてください・・・。」

「うへへつ、大丈夫だぞお～栗原～。チェック受ければ親には内緒にするからなあ・・・。」

~~~~~

「ちよつと、何なの、それはげ。」

「まあ、そういう奴だつたんだよ。」

「後から聞いたんだけど点数上がつたつてもたつた10点ぐらいだつたんだぜ？」

「ハゲ田には理由なんて何でもよかつたんだよ。要は”チョック”したかつただけみたいだな。で、偶然にも俺はこの場を通りかかったわけだ。」

~~~~~

以下、麻生真一がモノマネをしてお伝えしています。

「おい、ハゲ。随分と楽しそうじゃないか、えええ？」

「あ、あ、麻生！な、な、なんで！」・・・。

お、おまえのクラスは「じょぎやないぞー！」

「うーん、何かハゲ臭いからよおー。気になつて授業に集中できな
いんですよー。」

「ぐ、ぐえつー！」

「あれ？まだハゲ臭いなあ・・・。もう一発いっとか・・・。」

「ぎゃびんー！」

「「」のハゲ臭さは異常だなあ・・・。
「」なつたら完全脱臭しないとなあ・・・。」

「びぱつ！
ひぎやぴつ！

し、しへやー！

ぎゃむばー！」

「あ、あの・・・わ、私なら大丈夫ですから・・・。
だ、だから・・・。」

「生徒力イチヨーは優しいねえ・・・。
でも、「」のうのは許しちゃダメだぜ？」

「どつゅー！」

「で、でも、これ以上やつたら先生死んじゃいますー。」

「どつっぽー！」

「いいの、いいの。先生なんてここにはいないから。ここにいるのはハゲ臭い、ただのハゲ虫だから。」

「にせんだもつ！」

「あ、麻生君、この前も問題起こしたばつかでしょ？」

こ、これ以上何かやつたらダメだつて言われてたじやない?」

「はっ？何でおまえがそんなの知ってるの？」

「あ、あの・・・先生方から生徒会にも連絡があつて・・・。その、
それで・・・。」

「ふうん・・・まあ、こいや・・・」
「ままでやつたら後何発か増え
ても平氣でしょ?」

「じ、じびやつ！

七

「だ、ダメです、あ、麻生君！」

「びべつ！

すむるん！」

「...ハタチ、ハタチ、ハタチ」

「じゅばん」

{ } { } { }

「ねえ、麻生君。ハゲ田の悲鳴はもういいんだけど麗奈はいつで
くるの？」

ひょっとして、話が脱線しない?」

「ば、ばっか、これからでてくる所だつてのー。
ちや、ちゃんと最後まで聞けよ・・・。」

「あら、じめんなさい・・・。

だつて、はげ田さんの悲鳴がやりたかつただけなのかなって思つ
ちゃつて・・・。」

＼＼＼＼＼

以下、麻生真一がモノマネをしてお伝えしています。

「もしもし、きみ。」

「どうどうどうりんー
どなどなぼりんー！」

「ひひ、少年。」

「ひもなつちー。」

「・・・あ?

誰が少年だ・・・?」

「きみだよ、少年。」

「おい、俺を少年なんて呼ぶなっつーの。
つか、おまえ誰だよ？」

「トヨヒツモニニシテセサセタヒリヒトヨリトモヘ。」

「おい、人の話聞けよ。おまえ、誰だつての？」

「下供ひません」とやめたひりんと教えてあがむ。」

「ハゲの臭い取りは終わりだ。次は生意気な女の教育だな・・・。」

「またまた、キリの生意氣なことは負けるよ。」

「うれしいねえ～久しぶりに俺とケンカしてくれる奴が現れたよ。後から私、女の子だから許して、なんて言ってくれるなよ？」

「あれ、今度は私を殴るんだ？」
やつぱり子供だね、キミつて。実力の違いもわからないんだもん。

L

「ゾ」託はいいから、死ね。」

「はづれー。ダメダメ、そんなんじゃ一生私には勝てないよ。」

「ぬ、ぬかせ！」

「はあ～開けて、あぐびがでそつだよお。。。。」

גראן טרניר

「ふわあゝああ・・・ねむう・・・。」

「……殺す！」

「ぶんぶん、何かハエがいるみたいだよお。」

「ちよ、ちよ」まかといへー

「ハルカは嘘うそでない！」

一
あ
あか
ー
！」

「あ、しまった・・・手加減してないや・・・。
ま、丈夫そうだし、いつか・・・。」

「ぐ、
が・・・・・・・・

—

「ねえ、まさか、一撃でやられたの？」

「う、うるさいな・・・油断してたのもあるんだよ・・・。まあ、とにかく気づいたら保健室でな。」

~~~~~

以下、麻生真一がモノマネをしてお伝えしています。

「ぐつ・・・ビ、ビ」だ・・・！」へ。」

「あ、気がついたんだね、麻生君？」

「あ、ああ？ せ、生徒かいちょー？  
あれ・・・？」

「やつ、少年。」

「お、おまえつ・・・あ、いつつ・・・。」

「あ、ま、まだ無理しちゃダメだよ・・・。」

「田が覚めたかな、ボク？」

「い、いのやうな・・・。」

「未熟、未熟。あの程度で糀がつてるなんてかわいいね、少年？」

「くつ・・・お、おまえ何者なんだよ？  
俺を簡単にあしらいやがつて・・・。」

「キミが弱すぎるだけだよ。」

「い、いひたとい！ それより、おまえ名前教えろっての。」

「こりこり、立場が弱い君の方から先に名乗りなさい。  
力関係はもう成立してるんだからね。」

「くへ、あ、麻生だ。一年の麻生真一。名前くらい知ってるだろ？

が  
？  
」

「くつ、しの・・・真一だよ。麻生真一。」

「そつか・・・じやあ真一君つて呼んであげるよ、少年。」

「な、馴れ馴れしいつづの！」

「キミがもう少し大人になつたら麻生君つて呼んであげる。キミだつて子供の時は真一君つて呼ばれてたんでしょ？」

「呼ばれてないっての！」

「あ、それじゃ真ちゃんかな？」

「ハハハ、アーニー、おまえ、いい加減名前覚えてよ!」

卷之三

は？だから、九条麗奈たって教えたでしょ？」

「そうじゃなくてたなあ…・・・何でおまえあんなに強いわけ?」

私が強いんじゃなくて、キミが弱いの、真一君。

「馬鹿言つなつての、俺は強いんだよ。今までケンカで負けたこと

なんてないんだぜ？」

「ケンカねえ・・・素人相手にいい気になつてるだけでしょ？  
武道の世界には真一君より強い人なんていくらでもいるよ。」

「はつ？なんだよ、その武道の世界つて・・・。」

「武道で全国や世界で活躍する人とか、相当強いよ。  
真一君なんて、ホント相手にならないんじゃないかなー。」

「空手部の奴なら何人も倒したつての。  
武道なんて、あんなの形ばつかだろ？」

「だから全国レベルの人だつてば。そういう人はちゃんと実力も備  
えてるの。  
何なら、うちの剣道場来てみる？高校生とかだけど全国レベルの  
人も何人かきてるし。」

「はつ？うちのつて、おまえの家、道場なの？」

「まあね、お父さんが師範やつてるの。真一君さえよければ、鍛え  
直してあげるよ。」

「んだよ、随分と世話やくな、おい。」

「まあ、やりすぎではあつたけどハゲ男から  
律子を守つてくれたみたいだし。そのお礼かな。  
それに、真一君も私に負けつ放しじゃ悔しいんじゃない？  
真一君が眞面目に道場通つて鍛え上げてから、もう一度だけ再戦  
してあげてもいいかな、つて。」

「うん……良い度胸じゃないか？」

俺がその道場に通つて鍛錬とかしたら絶対におまえには負けないぜ？」

「それはどうかなあ……真一君つて弱そうだし。」

「くっ……絶対勝つてやるーおまえには絶対勝つてやるー。」

「うんうん、若い内はそのぐらい元気があった方がいいよ。」

「同じ年だってのー！」

（――）

「あなたって単純なのね……。」

「言つたな……まあ、俺なりに結構ショックだつたんだよ。」

同い年の女子に手も足もでないなんて今までの俺からは考えられないからな。」

「これがきっかけで真面目になつたつて言つか……。」

「まあ、真面目になつたつて言つか……。」

俺が一撃でのされたつて話はあつという間に近辺に広まつてな。すると、どいつもこいつも途端に態度でかくなつちまつてな。

昨日まで俺の顔見るだけでぶるつてた奴らが急いでかい顔して俺の前を通つていくんだけ？

何か、俺的にはどうでもよくなつてな。それに、練習に忙しくてそんな暇がなかつたつてのもあるけどな。

九条とはそれからの腐れ縁だな。」「

「で、今もまだ麗奈にはかなわないわけだ?」

「い、言つな・・・あいつ、本当に強いんだよ・・・。  
つたく、霧島といい本当に同じ年なのか?あいつら・・・。」

「ふふつ、そうか、才能ある人つて本当にずるいよね。  
お互い、がんばりましょう。彼らの才能に負けないよう、必死に  
努力してしがみついて・・・。」

「まあ篠崎は俺より見込みありそただけどなー。  
おまえもめげるなよ。」

「ふふつ、ありがと。」

九条と出会つてから俺がずっと味わい続けてきた劣等感。  
平凡たる自分の才能を呪い、天との才を持つ者に憧れ血のにじむ努  
力を続ける日々。

篠崎も霧島を前にその思いをしてきたのだといつ。

俺達は案外似たもの同士あつたのかもしない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4823ba/>

---

私の転移物語

2012年1月14日22時07分発行